愛宕神社にまつわる民話

白い馬にのった愛宕様

仁古田から塩田へぬける舞田峠の登りにかかる少し手前にかなり大きな赤い鳥居がある。この鳥居をくぐると、なだらかな坂道が少しあって、そこから石段が続いている。石段は三百段ほどもあり、登り切った所に愛宕神社がある。結構広い神楽殿や宝物殿蚕影社殿などいくつかの建物が山の中腹に、平らな所を利用して建てられている。ここから見渡せば仁古田は勿論、浦野、岡、小泉、横山から遠く川辺の村々までが良く見える。

その昔、福田郷と呼ばれたこの一帯の守り神様として此処に愛宕様が祭られたと言われるのも、なるほどと思われる。

この愛宕様と呼ばれる神社は全国各地にあり末社が多くあって、ここのように小高い山の峰に建てられていることが多く、見晴らしの良い所から村々の安全、特に火災から村人を守る、火伏せの神様だと言われている。愛宕様は白い馬に乗っているといわれ、この仁古田の宝物殿の中にも白い馬が祭られていると言うことである。

この愛宕様と白い馬にまつわるこんなお話が、仁古田の人々の間に語り伝えられている。

その昔、仁古田本村は百戸ばかりの家々がたち並ぶ静かな集落であった。ぽつぽつ苗代作りを始めるようになって、畑の草も伸びだしたと村人たちが忙しく農作業に追われていた、春のある夕方じぶんのことであった。晩ごはんの支度をするかまどの煙があちこちの家から立ちのぼるころ、与八は「おい　かあちゃん、おめえもういいから晩げの支度に先へけえれや」と言うと、女房のおミツは「あい、さっきセリを取っといたで、およごしでもつくらず」と、一足先に上って行った。「どれ　おらはもうちょっと」と与八が鍬を振り上げた時、遠くからどこからともなく、馬が速足で駆けて来るような「パカッパカッ」という音が聞こえて来た。のんびりしたこの村の暮らしの中では、めったに無い事で、気をつけて足音のする方へ耳を傾けると、たしかに馬の駆ける音で、しかもかすかに「チリンチリン」という鈴の音も同じ方から響いてくるのであった。「あれ、いったいなんだや」急いで鍬をほっぽり出すと音のする方へ駆け出して行ってみたが、暮れかかった夕もやの中を、かすかに白い馬らしいものが駆けて行くのが見えたような気がした。

「あっ、あれは」と驚いて目をこすってよく見ようとした時、もう馬の姿は見えなくなっていた。かすかに鈴の音の響が耳に残っているだけだった。与八が慌てて家へ駆け込むと、「オイお前た、馬を見なかったか白い馬を、しかも鈴を鳴らしてだ」とミツや子供達、イロリにかがみ込んでいるじい様に聞いた。

晩ごはんを前に騒いでいた子供達も忙しく晩げの支度をしていたミツも、少し耳の遠くなったじい様も、誰も馬の足音、鈴の音に気づいた者は居ませんでした。けれどじい様は、「そりゃ、愛宕様が通られたに違いねエ、みんな火に気をつけろや、愛宕様が白い馬に乗って鈴を鳴らして通られるのは、近々このあたりで火事があるから気をつけろっちうこんだと、オラ昔聞いたことがあるでや」「じいちゃん本当か」「そりゃえらいこんだ」。

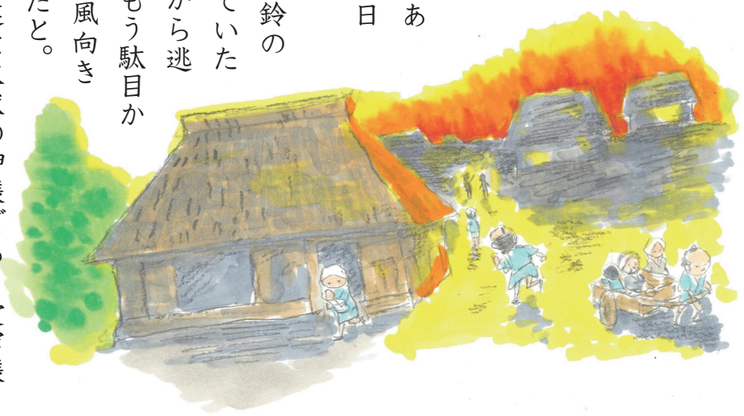
次の日その近所ではその話でもちきりであった。「そう言えばオラもゆんべ馬の駆ける音を聞いたような気がするわな」「うん、鈴の音といわれれば暮じぶんに聞いたような気もするで」と言う者もいた。

けれど馬の足音も鈴の音も全く聞かずに半信半疑の人たちもいた。それから二、三日した春にしては暑いくらい良く晴れた日の事。

昼ごはん後に小さな子供達の火焚きから、風にあおられ、強い風になってたちまち燃え広がってしまった火が、本当に本村の半分近くも焼き尽くすほどの大火事になってしまったのである。それは慶応元年四月十八日の出来事であった。

与八の家をはじめ愛宕様の鈴の音や馬の足音を聞いて用心していた家々の方は、不思議と火の手から逃れた。軒先までも燃えてきてもう駄目かと観念して目をあけると急に風向きが変わって助かった家もあったと。

この事があってから村の人達は火伏の神様である愛宕様を一層大切にするようになって、年一度のお祭りも一段と盛大に行われるようになったと言うことです。



◆「白い馬にのった愛宕様」は昭和六十二年三月二十七日、川西有線放送で放送されました。伝承をもとに、当時の川西中学校図書館司書の久保田直子先生（下室賀在住）がお書きになったお話です。

◆「仁古田の歴史」（平成四年十一月一日発行）にも収録されています。